第２回　縄文土器の見方

宮原 俊一（東海大学文学部）

はじめに

縄文土器といえば、誰もが教科書や図鑑、博物館などで見たことがあるでしょう。その形や装飾に、すばらしさや面白さを感じる人も多いと思います。世界でも類をみない独創的な形や装飾をもつ縄文土器は、１万年以上にもわたって日本列島に住む人々の生活を支えつづけてきました。例えば、食材を煮込むため（調理）、料理を盛りつけるため（食事）、水や食糧を保存する（貯蔵）だけでなく、内容物をまとめて移動する際にも利用されていたことでしょう（運搬）。

このように、さまざまな用途が考えられる縄文土器ですが、時代と地域によってその形や装飾が異なります。考古学が縄文土器を研究の対象として扱う第一の理由は、土器が時間の経過をはかる‘ものさし’の役割をもっているからです。製造年月日が土器に残されているわけではありませんが、二つの異なる顔つきの土器を比較し、その新旧を明らかにできるほど土器研究は進んでいます。そして、第二の理由としては、縄文時代を通じてどこでも大量につくられていたという事実があるからです。普遍的に存在していた道具だからこそ、地域ごとに異なる特徴をもつ土器がつくられていたことが明らかにされています。

今回の講座では、縄文土器の見方‘観察のポイント’をわかりやすく解説していきます。

１．土器の形と大きさ

縄文土器は深鉢形、鉢形、浅鉢形、壺形、注口付、皿形など用途に応じてつくり分けられていました。同じ形（器種）でも、大きさ（高さ＝器高、幅＝口径・最大径など）が異なる場合があり、用途に応じてつくり分けがされていたと考えられています。また、器種によっては台（脚）を有するものや、把手や突起をもつものなどがあります。縄文時代後期には、深鉢形の精製土器と粗製土器の分化がはじまり、ここにも用途（または使う場面）の違いをみることができます。

土器はそれぞれの部位に名称がつけられており、一般的に口縁部(口縁)、頸部、胴部（体部）、底部に分けられます。ほぼ水平につくり出された口縁部を平口縁（平縁）と呼び、いくつかの単位で波状につくり出された口縁を波状口縁と呼びます。

ほとんどの器種は平口縁となりますが、深鉢に関しては、波状口縁をもつ土器も多く認められ、縄文土器の一大特徴をこの波状口縁にみることができます。

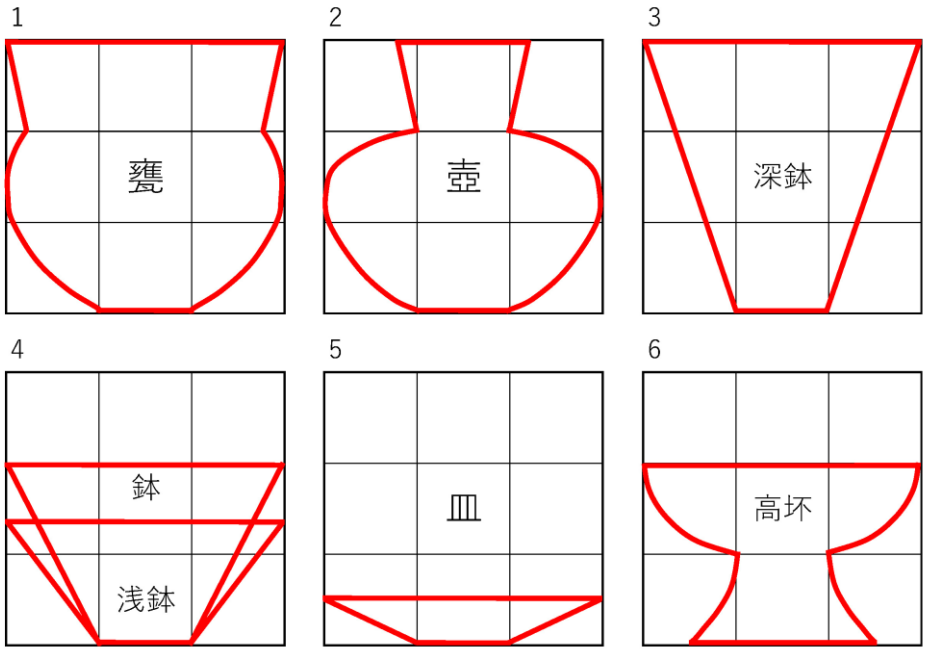

図1　正方九等分法による土器の器種分類

人類にとって革新的な発明ともいえる土器ですが、その初現は深鉢形土器と考えられています。しかし、形や大きさだけではその用途は特定できません。

【縄文土器の場合】

- **調理具（煮沸）➡** 深鉢形・鉢形
- **容器（盛り付け・貯蔵・運搬・棺）➡** 深鉢形・鉢形・浅鉢形・注口付・台付鉢・壺形
- **加工・生業（トチノミのあく抜きや製塩）➡** 深鉢形
- **副葬品（埋納）または祭器　➡** 鉢形・浅鉢形・注口付

２．土器の製作

縄文土器は可塑性に富む粘土を利用して形づくり、乾燥後に 500～700℃程度で加熱してつくられています。素焼きの焼物は縄文土器のほか、弥生土器や土師器、埴輪やかわらけなどがあげられます。

製作工程はおよそ次のような手順で進みます。

① **原料調達**
② **素地（きじ）の作成**
③ **成形（せいけい）・整形（せいけい）**
④ **調整（ちょうせい）・器壁（きへき）の仕上げ**
⑤ **施文（せもん）**
⑥ **乾燥**
⑦ **焼成（しょうせい）**

縄文土器をもっとも特徴づける装飾は、沈線や粘土の貼り付け、粘土の隆帯、連続する刺突文などによって文様が描かれ、地文として縄文（縄目）や条痕文などが施されています。縄文土器の名前の由来ともなっている縄文は、すべての縄文土器に付されているのではなく、時期や地域によってはまったく縄文が認められない土器もあります。

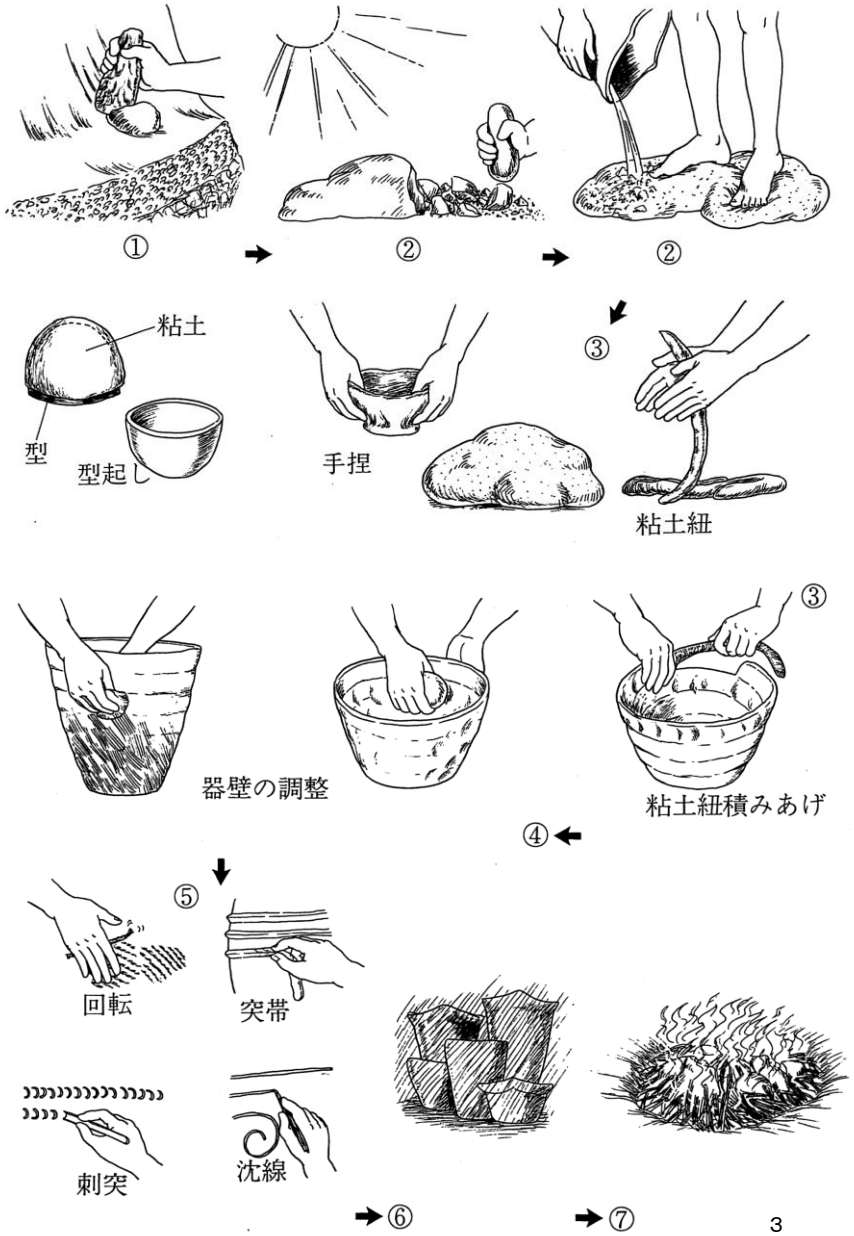

図2　縄文器の製作工程　（潮見 浩 1988 より転載）

土器製作にみるキーワード

胎土（たいど）：焼成後の焼き物の素地。粘土だけではなく、砂や植物を混和材として加えることが多い。

施文（せもん）：器物の表面に文様を描く[1]こと。線刻・点刻・彫刻・回転押捺・押引き・粘土貼り付けなど様々な手法が考えられます。

施文具：土器に文様を施すために用いた道具で、木の棒や竹、骨片、縄や貝殻などが考えられます。

縄文原体：縄目をつけるための施文具で、小さな撚り縄を器表面に押し当てながら転がすことで縄目が広がります。

文様：装飾効果を高めるために土器の表面に描かれた図形。主に曲線と直線で構成され、入組文・雷文・流水文・綾杉文などさまざまな種類の図形が考えられます。

地文：縄文土器の場合、下地となって文様効果を高める役割を果たす装飾。縄文（縄目）や撚糸文、条痕文・条線文など、図形をともなわない模様のこと。

写真1　縄文時代の草創期・早期の深鉢形土器
（1 青森県表舘(1)遺跡、2 群馬県下宿遺跡、3 神奈川県野島貝塚）

３．時期と地域の違い（土器型式）

① 縄文土器は時間の経過をはかる‘ものさし’として利用できる。

② 縄文土器は普遍的に存在し、形や文様に変化が認められる。

縄紋土器型式の大別

	渡島	陸奥	陸前	關東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根？× (+)	ひじ山 粕畑		黒島×	戦場ヶ谷×
前期	石川野× (+)	圓筒土器 下層式 （4型式以上）	室濱 大木 1 〃 2 a,b 〃 3—5 〃 6	蓮田式 花積下 蓮田式 關山 蓮田式 黒濱 諸磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 蹄場	鉾ノ木×	國府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	轟？
中期	(+) (+)	圓筒上 a 〃 b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8 a,b 〃 9,10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E 〃（新）	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 ？
後期	青柳町× (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B 〃 安行 1,2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	亀ヶ岡式 (+) (+) (+) (+)	大洞 B 〃 B-C 〃 C1,2 〃 A,A'	安行 2-3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× 〃 × 保美×	宮瀧× 日下×竹ノ内× 宮瀧×	津雲下層	御領

註記　1. この表は假製のものであつて，後日訂正增補する筈です。
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。

図3　山内清男の編年研究：1937（昭和 12）年作成

４．土器の肌合いと色

（実際に土器を観察しましょう）

５．文様施文と縄文の種類

・施文の方法

① 施文具を押しつける：施文具の凹凸が逆になって土器面に残されます。刺突文、半截竹管文、縄の側面押圧などがあります。

② 施文具を移動しながら押しつける：施文具の凹凸が線状になって残されます。沈線文、押引き文、貝殻復縁文（条痕文）などがあります。

③ 施文具を回転させて押しつける：撚り縄を回転させる縄文が代表的です。撚糸文や押型文も回転押圧による施文方法です。

④ ヘラで粘土を削り取る：不要な部分を削ったりなでたりして文様を浮かび上がらせます。隆線文、浮線文。

⑤ 粘土紐貼り付け：細く伸ばした粘土紐を貼り付けて文様をえがきます。隆起文、隆帯文など。

⑥ 磨消縄文：縄文を施した後、沈線で区画した部分を削り取ったり磨り消したりして、文様にアクセントを加えます。充填縄文も同じ効果が得られます。

⑦ 研磨・塗彩：光沢が出るまで粘土表面を磨きます。赤色または黒色の顔料を混ぜた漆を器面全体に塗ったり、文様を描いたりします。

・縄文原体と縄文（→次回の講座で詳しく解説します）

撚り紐（縄）を土器装飾の道具として、土器表面に押圧または回転押圧を与えることで現われる縄目文様を縄文と呼びます。このことから縄文を土器の表面につける道具を縄文原体と呼んでいます。撚り紐からつくられる縄文原体は、右撚り・左撚りの組み合わせと撚り合わせる回数などにより、様々なパターンの縄文を表現することができます。縄文原体そのものは遺物として確認されていませんが、そのほとんどは植物（草木類）の繊維を利用したと考えられています。

写真２「１段の縄」

写真３「２段の縄」

〔参考文献〕

麻生　優・白石浩之『縄文土器の知識Ⅰ　草々・早・前期』東京美術　1986 年発行

江坂輝也　考古学シリーズ 1『考古学の知識』東京美術　1986 年初版

大塚初重・戸沢充則編『日本考古学用語辞典』柏書房　1996 年発行

潮見　浩　1988『図解　技術の考古学』有斐閣

鈴木公雄　『考古学入門』東京大学出版会　1988 年

藤村東男　考古学シリーズ 15『縄文土器の知識Ⅱ中・後・晩期』　東京美術　1984 年発行

渡辺　誠　考古学シリーズ 4『縄文時代の知識』東京美術　1983 年発行